

2024年4月1日(月)

英国公共図書館の知られざる魅力

新しい年度の始まりです。咲き始めたソメイヨシノの下を、春めいた明るい色の服をまとった人々が行き交う季節になりました。在校生はもとより、本校へ入学してくる高校 37 期生、中学 40 期生の皆さんの意欲燃えた明るい笑顔にお目にかかれることを心待ちにしています。

ところで、わずか 2 週間足らずの春休みも残り 1 週間を切りました。前半の 1 週間は訳あって誰とも出会うこともなく、テレビやラジオ・スマホなど雑音のない生活をしていました。お陰で校務とは少し離れ、エッセーや小説などを一気に楽しく読むことができました。

文献①と③(以下○番号は末尾の参考文献の番号と一致)はともに芥川賞受賞作品(第 165 回 2021 年上、第 170 回 2023 年下)です。ストーリーは読んでからの楽しみなので、ここでは触れませんが、①は 3.11 東日本大震災との関係、③は東京オリンピックを巡る国立競技場から得たインスピレーションと AI の使用で話題なった作品、どちらも技巧派と呼ぶに相応しい内容で一気に読み終えました。また、④は韓国の作家の翻訳本。韓国の首都:ソウルから少し離れた町:広州(京畿道)の片田舎に暮らす母と娘の物語で、高い塀に囲まれた家で育ち、隠された母と自分自身の過去をあばくという設定。事実を多面的に見るというストーリー展開は、考え方の上で参考になりました。

社会科学専攻したものとしては、娯楽本としてもドキュメンタリー的な書籍を好む傾向にあり、綿矢りささんの文献②やブレイディみかこさんの文献⑤、⑥は、それぞれわずか 1 日足らずで読了しました。いわゆる研究者の書いた定量的・定性的な著作ではなく、それぞれ中国・北京とイギリス・ロンドンと場所や生活スタイルこそ違え、自らの体験を基にしたリアリティの高い作品で日本との比較を交えた比較文化・文明批評となっています。

そんな中、今回、紹介したいのは、⑤『ワイルドサイドをほっつき歩け』です。これはサブタイトルにあるように、教育学や社会学に携わる人にとっては名著とも言うべき⑦『ハマータウンの野郎ども』世代の人々のその後の人生を描いたという作品で、自らが生活するロンドンの労働者階級居住区で暮らす人々の生活や人物像を描

いたものです。背景として、ブレッグジット前後から今日に至るまでのイギリスの世相に関する鋭い文明批評となっています。巻末には、手際良く簡潔にまとめられたイギリスの世代説明がコンパクトに付されており、イギリス社会の理解にとっても便利です。

イギリスと言えば、私の中学・高校時代の1960年代後半から70年代前半まで、イギリスでは「ゆりかごから墓場まで from the cradle to the grave」というスローガンの下、社会福祉が隅々まで行き届いていることを「地理」「政治経済」の授業で習ったことを思い出します。当時のイギリスは労働党政権で、低所得者たちも失業してもすぎに失業給付をもらうことができ、次の仕事に就くまでの間、近くにある公共図書館に通って存分に読書に勤しんでいた人々が多くいたようで、図書館は大人で満席だったそうです。そのため、中には地元事情に詳しく「界隈史研究家」と呼ばれるような知的な老人をも輩出したのだとか…。

しかし、1980年代に政権が保守党に入れ替わると、サッチャリズム Thatcherism の名の下、財政難を理由に緊縮財政派の「小さな政府」が推奨され、規制緩和と公共事業の民営化が推し進められました。その矛先は町の図書館にも向けられ、規模・時間縮小、閉館が相次ぎました。そのため失業者やリタイヤした高齢者たちの憩いの場がなくなりました。成人の再教育熱の高いイギリスでしたが、次第に学びの場も少なくなったと紹介されています。本書のお陰で、イギリスと日本との公共図書館のもつ役割や利用者層の違いについて、「知っているようで知らないイギリス事情」、目から鱗ともいべき新たな視点に基づく事実を学ぶことができました。

変わりゆく社会と急速な技術変化に伴い、日本でもリスキリングという言葉が多用されるようになり、「検定好き」な日本人の向学心をくすぶるオンライン講座が氾濫する昨今ですが、基本は「知的な好奇心を目覚めさせ、自ら学ぶ姿勢」が大切なことを、ロンドンの低所得者層の人々に再認識させられた次第です。こうしてロンドン中心部にある低所得者地区から図書館がなくなり、子ども遊戯室の片隅で1台しかないPCを使ってネットで読書するハマータウンの大きなおっさんが登場します。作者の愛情あふれた巧みな表現で図書コーナーを巡る人々の様子が面白おかしく描かれていますが、現実には私のような老人にとってPCで読書することは辛い作業です。

さらに、⑤では「EU 離脱(ブレッグジット Brexit)」を掲げる保守党

への賛否を巡って家族が分断された友人の話、EU への拠出金を NHS (国民保健サービスサービス National Health Service) に当てるという保守党の主張の過剰宣伝に翻弄される人々の姿を描くことで、イギリスの庶民生活の悲喜交々な様子が目の前に浮かぶかのように見事に描き出されています。また、文献⑥『ブローケン・ブリテン』は、雑誌に 5 年間に渡って連載されたエッセイを集めたもので、ポスト・ブレグジットのイギリスの行く末を見据え、世界が多様性社会の到来を謳いながらも、右傾化し、自国あるいは自民族中心主義に偏って行くことの無謀さに警鐘を鳴らす作品となっています。同時に、コロナ禍によるパンデミックによって到来した「ニュー ノーマル」と旧来の「オールド ノーマル」がもたらした価値観の再認識など、風刺を交えた世相批判の書となっています。

併せて、渡英の動機となった音楽好きな作者らしく、ここかしこに流行った楽曲をモチーフにした比喻を織り込むことで、他のエッセーには見られない魅力的な作品にしていると言えるでしょう。

参考文献

- ①石澤 麻依 (2022) 『貝に続く場所』講談社文庫、240 頁。
- ②綿矢 りさ (2023) 『パッキパッキ北京』集英社、152 頁。
- ③九段 理江 (2024) 『東京都同情塔』新潮社、144 頁。
- ④ソン ボミ、訳:橋本 智保 (2024) 『小さな町(Woman's Best)』書肆侃侃房、224 頁。
- ⑤ブレイディ みかこ (2023) 『ワイルドサイドをほつつき歩け — ハマータウンのおっさんたち』ちくま文庫、320 頁。
- ⑥ブレイディ みかこ (2024) 『ブローケン・ブリテンに聞け — 社会政治時評クロニクル 2018-2023』講談社文庫、368 頁。
- ⑦ポール=ウィリス、監訳:熊沢 誠、翻訳:山田 潤 (1996) 『ハマータウンの野郎ども — 学校への反抗・労働への順応』ちくま学芸文庫、480 頁。

校長 石飛 一吉